

小出 檜重と 芦屋

「小出檜重を歩く」展に寄せて

問い合わせ 美術博物館 ☎38-5432

小出檜重は明治20年に大阪堺筋の膏葉屋「小出積善堂」に生まれ、大正から昭和の初めにかけて大阪・芦屋で活躍した画家です。西洋の伝統に基づく油絵を、日本人がいかにも描くべきかということを追求め、小出の代名詞ともいえる裸婦像や、静物画・ガラス絵など、日本の近代美術史上に残る数々の傑作を生み出しました。また文章にもその才能を見せ、身の回りの出来事や自らの芸術観などを、軽妙洒落なエッセイで書き記しました。今回は、小出檜重と晩年の5年間を過ごした芦屋に焦点を当て、檜重が描き・記した芦屋についてご紹介します。



《六月の郊外風景》 昭和5年(1930)・高島屋史料館蔵



《枯木のある風景》デッサン 昭和5年(1930)・美術博物館蔵



現在の芦屋川河口付近

芦屋への転居と西洋風アトリエの獲得

檜重は昭和元年(1926年)30歳の時に、住み慣れた大阪を離れ、芦屋に移り住みました。転居先の武庫郡精道村平田三九二番地(現川西町一五一九)は、檜重を支援する心齋橋の呉服商小丸社長・白井忠三郎の別荘地でした。芦屋の印象について檜重は「永い間の都会生活に比して、何ともいえず新鮮な心地がある(随筆『夏の水難』)と言います。その雰囲気について「気候は私たちの如くほそぼそと生きているものにとっては先ず結構で申分はない。そして非常に明るい事、私たちが淋しがり屋のために適

裏庭から見た景色

檜重の遺作として有名な作品に『枯木のある風景』(ウッドワン美術館蔵)があります。伐採された松の木と、後ろに見える阪神電車、高所の架線にたえずむ(人)架線修理工?という、何とも奇妙なコントラストの作品ですが、檜重はこの作品以前にも裏庭から見た風景をいくつか描いています。

《六月の郊外風景》(高島屋史料館蔵)では、生い茂る樹木や草花、そして空地の後ろに、紫色に染まる夕景と阪神電車の線路が見えます。右側に建つ洋館は、白井家の別荘です。

檜重自身描きたい気持ちは抱きつつも、裸婦や静物画に比べ、芦屋で制作されることが少なかった風景画ですが、この裏庭の景色は身近にあ



芦屋のアトリエでくつろぐ小出檜重(昭和3年)

大阪・神戸・芦屋 - 檜重的街歩き -

随筆『散歩雑感』でも、『私は毎晩散歩する癖がある』と述べているように、檜重は散歩をこよなく愛していました。芦屋をはじめ、神戸南京町ではモチーフとなる野菜を買い、コーヒーとメレンゲで一服したり、大阪では江之子島・中之島など新旧の建物が入り混じる場所を散策し、夜店で買い物をするなど、残された随筆には、街に対する記述が数多く見られます。

当しているようだ(随筆『芦屋風景』)と述べています。当時の大阪は、近代化の真つ只中で、工場地帯の煤煙などによる大気汚染が深刻な問題となっていました。

裏庭から見た景色

赤いパラソルがよく似合う

『枯木のある風景』に続く風景

はほとんどありませんが、阪神電車の架線支柱と傾斜角東に向けて少し坂になっています(のみが、檜重の見た風景に想いを馳せる数少ない手掛かりとなっています)。

白砂青松の『海辺風景』

ことから、白砂青松のコントラストは、決して油絵に合った風景ではなかったようです。

そんな檜重が描いた数少ない海辺の景色が『海辺風景』(美術博物館蔵)です。

一九三〇年に個人宅の新築祝いに制作された本作は、自宅からもそう遠くない芦屋川の河口付近で描かれたもので、檜重が憂慮した松と砂浜の組み合わせは決してぎらついたものではなく、穏やか海辺と陽春の空を背景に見事な調和を生み出しています。とすれば単調になりがちな遠近の空間も、停泊する漁船と女性たちが持つ赤いパラソルによって、すっきりと引き締まって見えます。

現在、海岸は防潮堤線となり、海辺の面影は河口部のみとなりましたが、散歩や休憩など、水辺に集う人々の姿は今も昔も変わりありません。



《海辺風景》 昭和5年(1930)・美術博物館蔵

『六月の郊外風景』(高島屋史料館蔵)では、生い茂る樹木や草花、そして空地の後ろに、紫色に染まる夕景と阪神電車の線路が見えます。右側に建つ洋館は、白井家の別荘です。

檜重は随筆『芦屋風景』のなかで、芦屋の景色を滞欧中にみた南仏や二ノスなどの地中海沿岸に例えながら、風景の描きにくさについて、白と堅いみどりの調和は画面に決して愉快な調和を与えないと悲観しています。本来南仏ではオリブが生えているところが、芦屋は黒くて堅い松の木。また白い砂は光を反射する

そうした大阪と比べて、北に六甲山、南に大阪湾を望む風光明媚な芦屋は、檜重にとって、さぞ新鮮な環境だったことと思います。

また檜重が芦屋に転居した理由は、もう一つありました。それは、よりよい制作環境の充実のためです。

大阪時代には日本家屋の長屋六畳間をアトリエにしており、和室で裸婦像を描くこと、それも油絵を「何と難儀な事件である事だろ(随筆『裸婦漫談』)と嘆いています。

檜重は転居翌年の昭和二年、念願だった西洋風のアトリエ(友人の建築家・笹川慎一による設計)を獲得し、思う存分キャンパスの上で、自らの芸術を追求することが可能となりました。アトリエは昭和六十二年に解体されましたが、現在は美術博物館の敷地内に復元されています。



復元されたアトリエ内部



現体育館・青少年センターから阪神電車方面を望む

《小出檜重没後80年・美術博物館開館20周年記念展》

小出 檜重を歩く - 1920年代 大阪・神戸・芦屋 -

本展では、檜重が歩いた大阪・神戸・芦屋のゆかりの地を、作品とともに、随筆・写真・関連資料(当時の街の様子を伝える地図や絵はがきなど)から、振り返ります。

上記特集で紹介した以外にも、仏教会館や芦屋公園の松林、芦屋川上流など、市内の風景が描かれた作品はいくつかあります。

ぜひ展覧会場で、実際の作品をご覧ください。

関連事業

- ギャラリートーク「小出檜重を斜め歩く」
 - 日時 1月8日(土)午後2時~3時
 - 内容 阪大生によるトーク 大阪大学総合学術博物館連携事業
 - 担当学芸員による展示解説
 - 日時 1月9日(日)午後2時~2時30分
 - 檜重ゆかりの地をめぐる街歩きツアー
 - 日時 1月13日(木)午前10時~正午 雨天中止
 - 行き先 地下鉄長堀橋駅 番出口(集合) 島之内・千日前・道頓堀・心齋橋
 - 定員 先着10人
 - 参加費 1,000円(地図・保険料含む)* 昼食・交通費別
 - 申し込み ファクス(☎38-5434)で美術博物館へ

「小出檜重を歩く」の「の・とる・あそぶ」

2月20日まで

〈月曜日休館〉

観覧料

- 一般 300(240)円
- 大高生 200(160)円
- 中学生以下無料
- * ()内は20人以上の団体料金

問い合わせ
美術博物館 ☎38-5432

のる・とる・あそぶ - 芦屋の鉄道・JR線の巻 -

学芸員による列品解説

- 日時 1月15日(土)午後2時~2時30分
- 親子で楽しむ鉄道ジオラマ作成教室
- 日時 1月29日(土) 2月5日(土) / 午後1時30分~4時
- 会場 体験学習室
- 講師 造形作家・山本修司氏
- 定員 親子各18組 先着順
- 材料費 2,500円

■申し込み 住所・氏名・ファクス番号・希望日を明記し、ファクス(☎38-5434)で美術博物館「芦屋の鉄道・ジオラマ係」へ走る「特急つばめ」の雄姿